慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	経済的史観論の価値(七完)
Sub Title	
Author	野村,兼太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1919
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.13, No.12 (1919. 12) ,p.1637(101)- 1643(107)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19191201-0101

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

を避くること、等なりとす。若くは生産物の市價を高めんとする総ての行為を比較的に稀少ならしむるに依りて自己の勤務

に支持せられて生氣ある幸福を生む 自重の心を養ふと共に他方に於ては 能を健全活潑に行使し發達せしめて 疑惑存在するの故を共基礎を害は 會の利益たるものは何だやどの問 らざるなり。 即ち是れなりとす。而かも此根本原則は真に社 のみに止まらざる力が社會の利益增進の爲めに 存在するは衆論 用せら 底に横はる根本原 、形體を新にするものなれども、 却說 進歩は 社會の目的に關する問題は各時 れ得る範圍程度に職由すと謂 人性中の最强に 何となれば社會の利 の結局に於て歸着する所 則は常に同 して單に最高尚なる 3 12 なるものにし 併し其總ての 一方に が人間の才 點に主とし ~ものにあ 開し若干の 望の光明 代に於て ふものは 自尊 72

尚なる生活を 營み得可き機會の總ての人に開 られ得可さものにあらざれども、 のなる其一方に於て吾人自身は急速に變化し能 めざる可からざるなり。 増大し行く 有らゆる生活條件を根絶せんが爲めとに不斷に 人が其を形つくると同樣また吾人を形つくる めと、其の自體に於て旣に劣等たるを免れざる あるを認めて之を狹小なる範圍に 貴からずして然かも爲されざる可からざるもの ぜしめざる可からず。 の最善の資質を喚起するが如き徑路に消費を轉 消費者を强むると共に消費の為めに備ふる人々 清新なる創意とを撫育せざる可からず。 ばなり。 同情と評價との温き息に俟ちて美はしき仕事と ざるも のなれば、遽かに多大なる改良を加へ 然れば吾人は眞の理解を有する 知識と物質的資源とを適用せんと努 吾人は幾多の仕事中に 吾人の生活條件は、 併し吾人は高 制限せんが為 吾人は 4 は

ずに押し進まざる可からざるなり。

經濟的史觀論の價値(七完)

野村兼太郎

九

これ依 已保存」のみを念とする時は著しく重要視さる。 的世界に於ける經濟的物的方面は如何。 利害を判斷するものにあらず。換言すれば「自 が理性的判斷をなずは單に生存のみを念として 的考慮を全然度外視すること能はす。 己保存」を脱却せる、 觀論以上に强調さるゝ所以なり。 然らば吾人が以上述べ來れる自由意思的理性 然として經濟的史觀論が他のあらゆる史 判斷を下すに當つて如何にするとも 否時に相矛盾せる 然れども吾人 殊に 吾人が 自自己 「自 物質

主張」の精神を有するなり。

所と一致せざることあり。 發生學的事物を觀察する危險を知り、 責任 に生存するは少くとも吾 善と見るもの時に必ずしも社會多數の善と見る する道徳律」を認識し得れば足れ が先天的に存在し、 せず。故にこゝにて の疑問を有するが故に脛々に斷じ去ることを欲 論じ得ざるにあらず。然れざも余は尚は期如き こと疑ふべからず。其の起源を「自己保存」若し 會的罪惡を忌避する所謂良心なるもの存在する 社會を形成し其の一員たる以上、 に對して一種の義務觀 ~は「自己主張」に求めてこくに唯物的倫理説を 吾人々類は單獨に生存するものにあらずし Solidarite の観念たると否とを問はず、 は斯 ~ 念を生ず。 トと共に「わが内に存 如き道徳的善悪の判斷 人の自己保存が社會に 然れども吾人が社會 そが所謂共同 り。唯吾人の 其の社會全般 且の幾分

せざるなり。 己保存」を全ふするも「自己主張」を傷け快しと 述せる 道徳的に 灰しと 思ふ行為をなさ ぐるは の矛盾點を發見せざるを得す。こうに於てか前 の點に於て「自己主張」を「自己保存」との間に一 の道徳的判斷は單なる數量に依らずして、各人 衆愚の多數は惡なること多し。こうに於て吾人 自己保存を損するものは先づ悪なりと判斷せざ 3 全ふすることを得るを以つてなり。 自己主張」の一方面となり、これをなして「自 数の善と見る所必ず否なるにあらず。否等ろ 是なることを肯定し得ざるにあらず。 べからず。 の内的道徳律に從はざるべからず。 此の點より見てのみ所謂大數觀察 故に多數の 佘は此 され

的滿足にあり。如何にせばよりよき家屋に住し、性的判斷に於ても其の標準とする所は先づ物質人類全體が自己保存のみを目的とする時は理

を全ふするために存する ことは同一なり。 然れざも其の先見者たると果た頑迷者たるとを 頑迷者たるとに論なく、 間はず、兎に角當時の社 如き少數者の內に所謂頑迷の徒無さにあらず。 夫と雖も其の志を奪ふべからざるなり。 張」に生きんと欲すればなり。 の多數に反して「自己保存」を沒却して「自己主 身の信ずる所を主張せんと欲すればなり。 に自己の生命を投げ薬で、惜まざるは、 を維持せんと欲する念慮あり。基督が十字架上 何等かの形式に於て、假合消極的になりとも是 張せんとす。 所謂經濟學上の最小費用を以つて最大利用を得 んとするのみなるべし。 よき衣を着し、よりよき食物を収 自己の意思自己の善と信ずる所を 然るに社會は多数の自己保存 故に其 是が生命を剝脱して恙 會に於ける異分子たる 然るに吾人は自 の先見者たると 此の點に於て匹 b 時に斯 基督自 己を主 社會

のみ。は誰かよく是を辯せんや。唯後世の批判を待つとなす。其の先見者たると頑迷者たるとの區別

きざる 所以は所謂社會の使命が斯如き多數 勞働者の云ふ所を聞け。 利益を少敷者が獨占するが 級爭鬪は如 を目的とするが故なり。故に所謂マル 共有を唱へたらんか、 攻撃して止まざる資本主義は近き過去に於ては 有財産制度の下にあつて少数の資本家是れを獨 少數者利益を壟斷せる貴族主義に對する反抗な しなり 經濟的史観論が多くの史観論中最 べか 宜敷く公平に分配し吾人勞働者も亦生 いらずと。 若しそれ一世に先立ちて生産手段の 何にして起るやと云ふに、多数者 然るに又現今社會主義者が 吾人多數者の利益を私 か其の生は 放に あらずや。 0) も有力なる 自己保存 1 スの階 笑ふ

> らん。 の花々しき勝利 の意思と勇氣はよく自己保存の本能に勝ちて遂 依つて支配さるゝ限り、 たらざる時に其の意見を吐露したらんには、 に奪ふべからざる精神 に大才ありて自己の主張を論する時、 色彩は極めて强調さる。 れるにあらず、 ルの思想の勝利は單にル すべて祉 若し は得られざりしなるべし。 會は多數の賢者若しくは愚者 N 的威力を發揮す。 テル 其の背景として經濟的 唯よく未來を洞見する テルが天才にのみ依 にして時機未だ來 其の天才 N D ラ

人
と
略 のみ必ずしも真の偉人にあらず。 なしたる者は、す 經濟的史観論は偉人の價値を無視するにあ 唯偉人にして世に花々しき名聲を博する者 4 枚に は有意識的に 様なる或 グ類の精 でに大部分の人心裡に其の偉 ひは 存在せる際に、 神的價値は單 似たる思想 幸に其の志を に成功せる 唱へたる 無意識

帰者の少からざる努力にも其の一部を歸せざる 場者の少からざる努力にも其の一部を歸せざる

を棄て 多數者の妨害を意させずして、自己保存の本能 て文化價値に貢献ありとなす途に進むに當り、 ことあり 感情に盲動する者等往々にして自己を沒却する ど斯如きは多く本能的衝動的行動に多し。 て日常些細の事實によりて起ることあ となすなり 内的道德律に依り善と信じ、自由意思に依り 嫉妬の情に耐へずして發する者、 ^ は斯如き方面の行動にあらず。 吾人が自己 「自己保存」で「自己主張」との衝突は暫々 い自己を主張する者の行動を目して偉な 0 然し乍ら真に精神的價値ありとせら 群集心理的 6 例 3

者の道徳律は階級爭鬪の為に、階級關係の為に、 者しそれゴルラル Hermann Gorter の如き論

らずや。 萬人の「自己保存」を完成せんに するや。 産階級のそれの まんとして努力する「自己主張」の方面をも、 せりや。 充質せしむれば足れりとするや。 勞働問題を見る。 を全ふし得ざるが放なりと。然らば自己の生命 主に對して犧牲の道德を守らば、遂に自己保存 其の平和的生活の豫想明瞭となる時、 主義的社會を欲求するに至りしは、 主義的社會に對する勞働者の欲求旺盛となり、 りどするは余の組 即ち生産關係、 一的熱情强烈となるべしと。而して斯如ら社會 若しそれ社會主義的新社會にして單に 否彼等も 換言すれば彼等の「自己保存」をのみ 妻子を窮乏たらしめざれば彼等は滿足 生産技術の為に變化するもの 彼等は自己保存のみにて満足 く滿足せしめんと欲するにあ 人間としてより高き文化に進 し難き所なりとす。 止まらんか、 飜つて今日の 勞働者が雇 彼等の道 即も社 有

己の保存」のために忠實、公正、 勿論すべての爭鬪は「自己保存」の問題に接して を發揮すべ 最も激烈に惹起さるゝを常とす。 の諸徳を充分に發揮し得る者は、 らく多數勞働者の滿足する所にあらざるべ にか も獅子と虎と荒野に餌を争ふに似て、 存の本能のみよりして爭鬪するに止まらば、恰 れを非とすべきや惑はざるを得ず。それ に力爭すると、勞働者が勞働者階級のために、 本家が資本家階級のために、「自己保存」のため 自己保存」のために呼號すると何れを是とし何 存」に適切なる自己階級のために是等の諸徳 を論せずとするも、唯此の點より見る時は資 公正等の諸徳を豫想するものなれど暫くこ 組せんのみ。然らば吾人の文化に寄與する 斯く考ふるはすでに先天的に忠 唯經濟的利益に從ひて何れ 叉よく 即ち其の「自 何れに組 自己保 「自己

處少し、 紳士閥諸階級の自衞の為、 云ふ紳士閥と雖も其の本性上、 に何等かの道德律を豫想す。すでにゴル にすでに第七節に述べたるが如く、 標に對して自己を主張する者なりと思惟す。 保存にのみ龌龊たるに止らず、 級に於て不道德なることは、又勞働者階級に於 を壓殺すと。斯く一方道德性を自己保存のため 的感情を有すれざも、 の鬪爭を是認し、他方の自己保存を否認するは、 ても不道徳なり、 ると云ふは滑稽なる矛盾にあらずや。 己保存の必要より生ずる階級認識に依りて生す に壓殺するを不可と稱し、 なる自己保存以上のあるものを認むるが故に 吾人は此の點より 此の點より見るも人類は單に自己 然るに一方の自己保存のため 實際政治に常るに及んで 他方道德的精神は自 必然的に其 見るもすでに 更により高き目 少からざる社 現今に於け 資本家階 への道徳性 テル 會

る資本主義的社會組織を覆して、社會主義的社ざるべからず。

(註一) Hermann Gorter: - Der Historische Materialismus (堺利彦氏譚本に據れり。)

0

まの根本に極めて有力なるは經濟的要素なるこれることを知れり。然れでも凡そ人類の歴史中なることを知れり。然れでも凡そ人類の歴史中なることを知れり。然れでも凡そ人類の歴史中なることを知れり。然れでも凡と欲す。吾人は

生活たると理性的自由意思の生活たるを間はずる自愛に「自己保存」を偏愛する時は本能的衝動の自愛に「自己保存」と「自己主張」の二方面存如何なる人類も自己を愛せざる者なく、から

手段の如何に依つて左右さる。 手段の如何に依つて左右さる。 手段の如何に依つて左右さる。 手段の如何に依つて左右さる。 手段の如何に依つて左右さる。

他吾人の精神的要素は、時に是等の生産手段と没交渉に一向に文化價値實現のために努力することあり。此の種の「自己主張」は遂に經濟的要素、換言すれば社會の多數者の力を以つてすると雖も如何ともなし能はざるなり。これ精神的要素は、時に是等の生産手段

論的考察に依つて、觀察され、又これに依つてものにあらず。文化價値を實現せんとする目的つて自然科學的因果律に依つてのみ形成さる、然乍ら人類發展の歷史は生産手段の如何に依

渇仰するに至るなり。 こへに道德律の存在を認識し、歴史上の偉人を 其の經濟的發展も精神的發展も是正さるべく、

して、略々論究せりと信ず。の價値、即ちてれと文化價値との關係如何に關斯して本論文の當初の目的たる經濟的史觀論

職つて本論文を起草せる時を思ふに、すでに数ケ月を関みし、徒らに冗漫の議論を弄し説かるべき要點を逸し去れること多きを恐る。唯余度を明確にし、整頓し、多様多端なる社會事象度を明確にし、整頓し、多様多端なる社會事象でる點に就て、必ずしも徒勢ならざりしこと、信ず。唯他日再び此の種の研究に充分なる是正信が。唯他日再び此の種の研究に充分なる是正を加へて、足らざるを補足するの機あらんことを期す。

(一九一九年一〇月一九日稿了)

闘する疑問(下) 同盟罷工の原因に

根 本 清 六

木

Parent Parent

今、その意見を簡單に紹介すれは、先つ『要 で其土地、其時に於ける物價の昂騰率に比例するを以て、其必要條件なりと假定せは、昨年十 こ月中一般賃銀は大體次の如き引上をなすを以て、其必要條件なりと假定せは、昨年十 とするは昂騰率に比例し云々を度外視することな も、これに關しては後に詳述するも、所謂一部 論者なるものゝ說は甚しき偏見なりと云はさる り、これに關しては後に詳述するも、所謂一部 からす、更に『大正七年十二月中妥當賃銀の算 定法』と題して『即ち三割五分の値上となすを以 定法』と題して『即ち三割五分の値上となすを以